序　文

“苦痛を和らげる”“いのちを守る”それは医療の原点。それが私たち麻酔科医の仕事です。

これは以前に私が所属していた千葉大学医学部附属病院麻酔・疼痛・緩和医療科のホームページ冒頭に掲載されているモットーである。私自身、これをモットーとして、40年間以上、診療や研究を続けてきた。苦痛を真剣に治療することを目的とした医療は現在では緩和医療と呼ばれているが、この医療の重要性が日本において強調され始めたのは、せいぜい30年前のことである。それ以前の医療現場では治療が優先され、命を救うためには当然それ相応の苦痛が伴うという信念があったように思われる。医学の歴史を見ると、ヒポクラテスの時代から麻薬を使用するような鎮痛法はあったようである。しかし、これが麻酔や緩和医療のように除痛を明確な目的とした医療として根づいたのは19世紀後半になってからである。言い換えると、有史以来ほんの100年前まで、先人は苦痛に対して科学的な機序を追究することも、機序に基づいた治療を行うこともなかったのである。私自身、緩和医療を勉強し、研究するきっかけとなったのは、教室の先輩であった故水口公信先生（千葉大学名誉教授）や平賀一陽先生（前国立がんセンター中央病院部長）が緩和医療の日本のパイオニアとして、がん性疼痛コントロールのためのモルヒネ徐放薬の普及に努めていたのを間近に見ていたからである。苦痛を単なる身体的感覚だけでなく、精神的、社会的、霊的な側面を持ちあわせている全人的苦痛（トータルペイン）として捉える視点が必要であることを知ったのもこのころである。

本書はいわゆる教科書ではなく、苦痛をトータルペインとして捉える本というような気持ちで執筆した。また、苦痛にはいわゆる痛みだけではなく、呼吸困難や痒み、疲労といったものまで広く取り上げることにした。基礎的な話や話題も取り上げたが、臨床の苦痛と関連する方向を失わないように書いたつもりである。

本書の執筆に関して専門家の立場から助言してくれた化学療法研究所附属病院麻酔科部長の志賀俊哉先生と千葉大学医学研究院麻酔学教授の磯野史郎先生、さらに、本書出版のために尽力された克誠堂出版の土田明さんおよび関貴子さんに厚く御礼を申し上げたい。最後に、長い研究生活を支えてくれ、本書の原稿を専門家以外の立場から通読し助言をくれた妻・西野薫にあらためて感謝したい。

2015年10月吉日

西野　卓